RITSUMEIKAN

さんしゃ Zapping

Vol.29　No.4（通巻 176 号）

2015 年 3 月

＜産社学会　ニューズレター＞

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL（075）465-8186　　E-mail: s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp

http://www.ritsumei.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/

〔目　　次〕

＜ご退職挨拶＞

私と産社、立命館ー定年を迎えるにあたってー	荒木 穂積	p.2
定年を迎えるにあたってーわたしと産社、立命館ー	櫻谷 眞理子	p.3
23 年を振りかえって	佐藤 春吉	p.5
専任の教育者、構成員から解放されて	峰島 厚	p.7
「情報処理統計学Ⅰ」の枠組み	門田 幸太郎	p.8
産社・社研での 5 年間、そしてこれから	湊　邦生	p.11

＜ご退職挨拶＞

私と産社、立命館－定年を迎えるにあたって－

荒木 穂積

私が赴任してきたのは1990年4月である。それから25年が経つ。ちょうど4分の1世紀、立命館でお世話になった。折しも今年、産社は50周年（1965年創設）を迎えるが、産社の歴史の半分を産社で過ごしてきたことになる。赴任した当時、産社の創設期の先生方もたくさんおられ、創設期のご苦労をうかがう機会も多かった。基礎演習や専門ゼミの進め方なども多くを教わった。赴任してきた頃は、国際関係学部（1988年）が創設されたり、政策科学部（1994年）が創設されたりして産社におられた先生が他学部に移籍していかれるなど大学全体の変化の大きい時期でもあった。

私に立命館に来るように薦めてくださったのは今年1月に亡くなられた加藤直樹先生である。ちょうど産社が現代化・総合化・共同化(頭文字をとって現総共:げんそうきょう、と呼ばれていた）に新たに人間化・文化化を加えた教学改革（1987年改革）がすすめられていた時であった。私の所属は、発達・福祉コースで、加藤先生が、人間発達論を担当され、私は発達保障論を担当することになった。それまで産社の心理学分野の先生としては、人間・文化コースに社会心理学の森田浩平先生、後藤金十郎先生（荒木が赴任したときには退職されていた)のお二人がおられた。加藤先生と荒木の二人が加わることによって産社教学は新たに人間発達系分野が拡がった。

赴任してきた時、産社は他の社系学部と同じように男子学生が多い学部であった。産社は、社会学、経済学、政治学など社会科学を中心に社系の教養学部(産業社会学部の英語名は、College of Social Sciences）として学問分野を拡げようとしていた。教学の分野として、人間化・文化化領域を拡大することによって女子学生の比率を高めることが当時教学改革の中ではよく話し合われた。1994年の2学系6コース制への教学改革では、現代社会学系とともに人間文化学系として人間化・文化化を教学の全面に押し出すこととなった。これによって女子学生の入学者が増え、女子学生比率は高まった。

25年間に専門ゼミを19回担当してきた。2015年度19期生のゼミ生を送り出すことになっている。これまで送り出してきた荒木ゼミのゼミ生数は約600名になる。教学改革に連動して、最初の1期生、2期生は男子の多いゼミであったが、3期生以降は女子が多くしめるゼミになっていった。ゼミ生の多くは一般企業で働いているが、医療や福祉、教育の現場で働いているゼミ生も少なくない。当時、所属していた発達・福祉コースのモットーは「福祉マインドをもった企業人や社会人を育てよう」というものであった。ゼミの卒業生とOB・OG会などで出会って仕事ぶりを聞くと、これまで進めてきた教学改革の道がそう外れていなかったように思われる。福祉マインドをもって活躍してくれている。

2001年に対人援助の専門職を養成することを目的に独立研究科として応用人間科学研究科が設置され、産社から4名が配属されることになった。私もその一人として2001年から15年間、大学院修士課程は応用人間科学研究科を担当している。応用人間科学研究科の修了生は今年度で約600名になる。応用人間科学研究科では、臨床心理士や臨床発達心理士、学校心理士などの専門資格を取得して、発達相談員やカウンセラーなどの専門職をめざす人も多い。産社からも毎年3割ほど学部生が進学してくる。荒木ゼミの卒業生で、応用人間科学研究科に進学して発達相談員やカウンセラーとして活躍している人が近畿圏を中心に20名ほどいる。発達相談研究会を立ち上げてこの分野のネットワーク形成を進めているが、この分野で立命館の卒業生が頑張ってくれている姿をみると教師冥利に尽きる。人を育てる大切さと責任の大きさを今更ながら感じている。

応用人間科学研究科の設置される前は、社会学研究科で高度専門職養成課程を中心に担当していた。最初に担当した修了生が2年前に社会学研究科博士課程に社会人として入学してきた。これまで取り組んできたことをまとめて行きたいという。卒業生がいろいろな形で大学に出入りすることはとても大切であるし、大学にとっても有意義なことである。これからの大学のあり方を指し示しているようにも思える。「学問は継続なり、学問に王道無し」である。実践と理論との相互の還流が進むことによって大学と現場との関係はより緊密になっていくだろうし、理論や方法論も現場や現実をくぐり抜けることによって鍛えられ、確かめられていくことであろう。

50周年を次への節目に、産社や立命館大学が、知的興奮に満ちた、学問のアリーナとしてさらに発展することを望んでいる。

定年を迎えるにあたって－わたしと産社、立命館－

櫻谷 眞理子

１．恒心館の時代

児童相談所を辞めて、教員になったのは1996年4月のことです。今では国際関係学部になっている恒心館に産社があり、1階奥が大会義室でした。そこで教授会も開催されましたが、夜まで続くので夕食を注文しなければならない日もありました。議論も大切なのですが、津市から貴生川までは車、そこからは電車とバスで、片道3時間かけて通っていたので遅くなるは困りました。

雪が降り始めたある夜のことです。夜更けに貴生川に着いた頃は吹雪になっていました。雪で視界が遮られ、まるでスキー場のようになってしまった山道を、スリップしながら運

転しました。ガードレールに何度もぶつかりましたが、崖下に転落せずにすんだのでほっとしました。結局、翌年に京都に引っ越しました。

講義科目はライフサイクル論、人格発達論、社会福祉援助技術各論１でした。その他に社会福祉援助技術演習、社会福祉援助技術現場実習を担当しました。児童相談所では心理判定員だったので、福祉ではなく心理が専門だと思いつつも必死で社会福祉援助技術（ソーシャルワーク）の勉強をしました。そのせいなのか、翌年には社会福祉課程委員長になり、実習指導の業務にも関わるようになりました。

社会福祉課程への登録は、発達福祉コース以外の学生でも可能だったので、3 回生は施設、4 回生は相談機関へと、多いときには 135 人の学生が実習に行っていました。巡回訪問も全教員で対応することになっていたので、教授会の時に先生方に訪問をお願いしてまわりました。多くの先生方に協力していただきましたが、有賀先生も毎年快く引き受けてくださいました。

実習担当として非常勤の方が一人、週 4 日来ていただいていましたが、とてもお忙しそうでした。そこで、行事などは学生に手伝ってもらいました。家から花瓶や何枚ものシーツを持ってきて、花を飾りテーブルセッティングをして、実習先の方たちと懇談をしたこともあります。今ではなつかしい思い出です。

２．ゼミ生との思い出

教員になった理由の一つに、児童福祉現場を変革するためには、確かな専門性を持ったスペシャリストを養成する必要があると思ったからです。その思いが強すぎたのか、ゼミ指導にも熱がこもりました。ゼミ生たちは、きっと戸惑いもあったと思いますが、人柄が温かい人たちだったので、受け入れてくれました。今では、卒業生が福祉の現場で活躍している姿を見ることが夢が叶った思いです。

学生と一緒に児童相談所や児童養護施設にフィールドワークにも出かけましたが、児童相談所の一時保護所の子どもたちと交流をした時のことです。女子学生が 4 年生の男の子とテニスを始めると、その子はテニスに夢中になりました。毎回、飽きずにテニスを続けるので、保護課長は彼にラケットをプレゼントしました。すると、彼は背中にいつも背負い、お守りのようにしていました。でも、その後施設に措置された彼を訪ねて行った時、「テニスをしているの？」と尋ねると、「ここではテニスはできない」「何でも我慢しなければいけない」とさみしそうに言いました。

その他にもいろんなエピソードがよみがえります。子どもたちと学生とのふれ合いは短いものでしたが、子どもはあのひとときのぬくもりと楽しさをきっと忘れないでしょう。一緒にデイキャンプに行った時の写真を見ると、学生に甘える子どもたちの笑顔に胸が詰まります。親に甘えることを許されなかった子ども達です。

３．研究者としての歩みは、ゆっくり・・・。

福祉現場で働いている時の私は実践家であり、同時に現場研究者でもあると思っていました。大学の研究者たちは現場の切実な問題の解決策を示すような研究を行っていないから、自分で研究するしか無いと思っていたのです。現場の方が先に進み、研究者は後追いしているのではとも思っていました。しかし、いざ自分が大学教員になってみるとその考え

は変わりました。あまりにも多忙で、現場にじっくり関わることができないことがわかりました。

私は慣れない教員生活で研究のための時間を確保することが難しい中、辛うじてこれまでやっていた子育て支援の研究を続けることができました。しかし、児童虐待の研究（リスクアセスメントや家族援助など）は遅々として進みませんでした。児童養護の研究（施設における子どものケアや退所者へのアフターケアについて、何年かかるかわかりません。デンマークの保育・福祉、引きこもり支援にも関心がありますが、これから深めていきたいと思っています。

このように、福祉の現場でさまざまな問題に関わってきた延長で、研究テーマも広がる一方ですが、どれも未完のままです。学生や院生たちには、腰をすえて研究するようにとよく言いましたが、自分を振り返ると冷や汗が出ます。

４．おわりに

産社には多彩な分野で活躍され、研究を行っておられる先生方が多く、魅力的な学部だと思います。この恵まれた環境で学び、研究していきたかったのですが、自転車操業の日々を送るうちに定年を迎えてしまいました。でも、これからやっと研究者としての一歩が始まるのではと思います。これからは一皮ずつ剥くように学び、少しでも現場に貢献していくことができればいいなと思います。

子どもの福祉、幸せを願って、研究や活動を続けてきましたが、ここまでやって来られたのは、多くの方に支えていただけたからだと思います。学生にも恵まれ、本当に幸せな教員生活でした。皆様方に深く感謝申し上げます。

23 年を振りかえって

佐藤 春吉

1992 年 4 月に本学産業社会学部に赴任してあっという間の 23 年間でした。当時立命館大学は私立大学の「改革」を推進することに熱心な大学で、私が赴任したときはちょうどＢＫＣへの理工学部の移転を控えているときでした。理工移転（94 年）のすぐ後に、文・社系学部のＢＫＣ移転問題が議論され、98 年に経済・経営が移転しました。同じ頃に、大分の地にキャンパスを設置し新大学を設立する話が持ち上がり、2000 年のアジア・太平洋大学開学へと、めまぐるしい「拡大改革」の連続でした。退職するこの年もＯＩＣ開学の年に重なっています。産社は、私が赴任したときは学而館にありましたが、その後、現在学生支援関連の施設となっている研心館に、その後は現在国際関係学部が使用して

いる恒心館に移り、その後さらに経済・経営学部が使用していた現在の以学館に移りました。産社は、規模は大きかったのですが、居所定まらぬさすらい人のようでした。カリキュラム改革も4年の完成年度ごとに改革するのが当たり前といった雰囲気でした。しょっちゅうそうした議論をしていました。私も夜間主コースの新設や福祉系学科の新設に関わりました。立命は「改革のデパート」と言われていました。いわゆる拡大路線にはもう陰りも見え、そこにはいろいろな矛盾や問題も伏在しています。今は、少子化と国際化の中で教育研究の質が求められる時代です。今や、このような課題に立ち向かい、大学や学園のかかえる問題を解決し、落ち着いた「ディーセントな大学」をいかに作りあげるかが焦点になっていることは確かだと思います。

赴任当時の産社の学生は、非常に活動的で学ぶことにも貪欲だったことを思い出します。私の赴任当時は学生とよくつきあいました。ゼミ合宿で学生が羽目を外してよく始末書を書いたのを思い出します。学生のタイプも変わりました。時代は閉塞感がただよい、勢いのいい自由闊達な学生は少なくなっている気がしますが、どの時代にも、その時代の問題に向き合う学生が生まれてくると思っています。こちらの感度を上げて行かなければいけないと思います。

研究に関しては、院生時代にマルクス研究からヒントを得て構想しその完成を目指してきた「多元主義的存在論」とそれをベースにした批判的社会科学の土台作りは、本当に「道半ば」で、不恰好なすがたのままです。能力もわきまえず、気恥ずかしいような大風呂敷を広げてしまい、収集もつかないまま退職の時期を迎えます。我が生来の非才と不器用さを痛感しています。ただ、その目標に向かう気持ちだけはまだ続いていますし、主観的かも知れませんが体力もまだあると感じています。なんとか少しだけでも形にして、ただの「ほら吹き」にならないようにしたいと思っています。

産社で、さまざまな仕事をさせていただきましたが、先輩同僚の諸先生、学部事務室や共研の職員の皆様に支えられ、助けられてなんとか「無事」退職を迎えられます。感謝です。

退職を迎え、さまざまなことを追憶し感慨に浸りたいのですが、実は、これほど忙しく時間のない年度末は、赴任して以来はじめてという事態に遭遇しています。この原稿も延ばし延ばしでご迷惑をおかけしました。この時期に、研究室の明け渡しの作業もまだ完了していません。助成金をいただいて出版予定の翻訳本の最終校正がようやくほぼ終わりましたが、余裕を持って進めていたはずのこの企画もいよいよぎりぎりになって細かな作業が集中し、睡眠時間もままなりません。まずは、「無事」退職すること自体が難事業です。このような状況で、意に満たないこの文章を書いています。落ち着いたら、皆様にあらためてご挨拶させていただきます。本当にお世話になりました。次の時代の産社をよろしくお願いします。

専任の教育者、構成員から解放されて

峰島 厚

2001年度から、人間福祉専攻の社会福祉士養成施設の機能強化という改革で、何人かの教員と一緒に赴任してきました。社会福祉士の養成ということでしたが、それ自体を合格人数等で追及するのではなく、というのが魅力でした。

前任校は、幼稚園・保育士・介護福祉士・栄養士など資格課程の、その分野の就職重点の短期大学でしたから、なおさらです。良い発想を持っていて個性的でよいなあ、と思う学生は、「可愛くない絵を書く」「親から歓迎されない」とはじき出されていました。短大ですから学生数の確保が第一と動かざるを得ず、その矛盾の苦しみをずっと味わってきました。やっとここで解放されると、期待して赴任しました。現場に寄り添いながら、現場の問題を外から眺め、本来はこうあるべきだと考えられる教育理念は魅力でした。

教育者としては、現場に入りながら入り込まない、というスタンスで、現場を研究対象とする、傍観的な客観性を確保するとしてきました。

学生には、未来の、現場を含めて選択対象として話を聞いてほしいと臨んできました。でもこれはできたかどうか、というところです。現場の話だが、傍観的な客観的に見た人の話としてきいてもらったのか、自信はありません。今でもそうですが、どうしても目が合う、表情で反応を示してくれる学生を見て話してしまいます。本当はこれではだめなのでしょうが、楽なほうに走っています。

ゼミの教育も、入りながら入り込まないが理想でしょうが、これはまだ入り口の段階でもたもたです。「入る」にはどうしたら・・・「入り込まない」ためには・・・、懇親会ではだめというのはつかめましたが、今も試行錯誤中です。苦い経験もしました。実習巡回でゼミ生から突然「失恋の相談」をうけました。学生との信頼関係ができたと喜ぶべきでしょうが、私はまったくそうとは思っておらず「えっ、なぜ私に」とあぜんとしてしまいました。本当に申し訳ないことをしてしまいました。これからも学んでです。

立命館への入職、「教員酷使大学」という評判の中でのことでした。魅力とともに不安材料もありました。会議の長さ、多さは覚悟していましたが、想定どおりでした。でもしんどさはなかったです。むしろ1年間は静かにと考えていたことを守るほうがしんどかったです。

なんといっても真剣に語り合っている、これが最大の魅力でした。前任校の好き勝手にではなく、統制された自由を実感できました。私にとっては民主主義の学校でした。

ただずっと気にかけていたことがありました。一つは大学運営全体の民主主義の問題でした。これまでの民主主義を守るための到達点に立って、というのが外から来た私には違和感がありました。自分たちが築いたことも大胆にメスをいれて。外から来た人だから、

ではないと後でわかってきましたが、歴史と実績があるからこそ、ではないでしょうか。この点はこれからが改革具体化とみています、今後も見守りたいと考えています。

もう一つは、民主主義の適正規模の問題です。前任校は大規模授業で 100 人でしたが、立命は○が一つついていました。教授会も白熱した討論ですが、現場の取り組みでいうと「会議」ではなく「集会」規模です。教育も運営も、規模が小さくなればきめ細かになりますが、それだけきめ細かな仕事は増えて・・みんなが一つになるのも複雑になって・・など単純な道ではないでしょう。これもこれからが改革具体化とみています。

ずっと気にかけていたことがやっと動き出せるように、退職が残念な世代になりました。

「情報処理統計学Ⅰ」の枠組み

門田 幸太郎

「情報処理統計学Ⅰ」を長年担当してきて伝えたかった枠組みだけでも説明しておきたい。

まず、統計学の基礎中の基礎は正規分布にある。その確率密度関数は、平均が μ で標準偏差が σ の場合、 $f(x)=\frac{1}{\sqrt{2\pi}\sigma}e^{-\frac{(x-\mu)^2}{2\sigma^2}}$ …①で求められる。ここでなぜπや自然対数の e が混じった式が出てくるのかを説明しなければならない。その前段階として 2 項分布の説明がいる。2 項分布は n 試行中ある事象が起こる確率を p とし、起こらない確率を $q(=1-p)$ とした場合、n 回中、ある事象が x 回起こる場合の確率を求めると、$p^x q^{n-x}$ となり、このような場合は、

${}_nC_x=\frac{n!}{x!(n-x)!}$ …②となる。ここから正規分布に近似するには、$n\to\infty$ の場合を想定すればよい。詳細は割愛するが、Stirling の公式 $n!\sim\sqrt{2\pi}n^{n+\frac{1}{2}}e^{-n}$ を②に代入すると①が得られることになる。

正規分布は、通常横軸を圧縮した釣鐘のような形として説明されることが多いが、実寸ではきわめてなだらかな山型である。この曲線の真ん中は生起確率が高く、端は低い。得られたデータの平均からの偏差と標準偏差との比に標準化した場合、1.96 を超える確率は.4750 となる。つまり、両端を考えた場合、

-1.96 より大きく、1.96 より小さい領域には.4750×2=.9500 で 95%が入ることになる。逆にいうと 5%がその領域からはみ出すことになる。データがそのような値をとる確率は低いと考える。心理学では確率が低い基準(棄却域)として 5%を採用している。
ある仮定の下、そのデータが得られた確率が棄却域に入る場合、極めて起こりにくいことが起こったと考え、その仮定を否定、つまり棄却するのである。これが検定の基本的な考え方である。

検定として用いられる代表的なものとしては、χ^2検定、t検定、F検定がある。χ^2検定は度数の分布を見ようというものである。たとえば 2×2 のクロス集計を取った場合、度数の分布に意味があるかどうかを判定しようというものである。

a	b
c	d

…③の表において、実測された度数の行、列の合計(周辺度数)を表示した場合、④のようになる。データの全数は $N=a+b+c+d$ となる。

a	b	$a+b$
c	d	$c+d$
$a+c$	$b+d$	N

…④

もしここで 2 つのカテゴリーがまったく独立だとすると、③の各セルには全数 N を周辺度数で比例配分した値が入ることになる。a のセルには $a+b$ を $a+c$: $b+d$ に分けた値(期待度数)、$\frac{(a+b)(a+c)}{N}$ が入る。b のセルには $a+b$ を $a+c$: $b+d$ に分けた値、$\frac{(a+b)(b+d)}{N}$ が入る。同様に、c のセルには $c+d$ を $a+c$: $b+d$ に分けた値、$\frac{(c+d)(a+c)}{N}$ が入り、d のセルには $\frac{(c+d)(b+d)}{N}$ が入る。これらの期待度数と実測度数との差を 2 乗したものと期待度数との比を足し合わせたものが χ^2得点となる。この χ^2得点が示す分布を χ^2分布という。得られたデータの分布に意味があるかどうかは、得られたデータが、完全に独立な場合に期待される値からどれだけ隔たっているかによって判定される。ここで期待度数との比を求めるのは、期待度数と実測度数との差を 2 乗したものを足し合わせたものはデータ数 N が大きくなれば大きな値を示すので、その影響を取り除くためである。

ここでχ^2分布を考える上で自由度の概念が重要となってくる。④の場合、周辺度数が与えられた場合、a、b、c、dのうち自由に変化できるのは１つだけである。一般に、自由度は(与えられた行数—1)×(与えられた列数—1)で求められる。与えられた周辺度数の中で、期待度数付近の組み合わせは大きな数となりその分だけ確率は高くなる。また、期待度数から離れた極端な場合の数は小さくなりその分だけ確率は小さくなる。このことからも、確率分布を決定するのに果たす自由度の意味が理解できる。

t検定は平均値の比較を行うものである。２つの集団のもつ平均値に統計的に有意味な差があるかどうかを問うものであり、その背後にはt分布が想定されている。いま２つの集団がm個、n個から成り立っているとした時、同一母集団からm、n個の集団を取り出して各々の平均を求めるとする。これを繰り返していけば、２つの平均のペアが得られる。これをプロットしてみるとm、n個に応じた分布が得られる。これがt分布である。データとして得られた平均値のペアが、このt分布のどこに位置するかを検討してみて、極端に現れにくいところに位置する場合、起こりにくいことが起こったとして、その前提となる同一母集団から抽出されたという仮定を否定して、両者は異なる母集団に属する、つまり有意差があると考えることになる。

t検定は２つの集団の平均値の比較をするのに対して、F検定は３つ以上の集団のバラツキを比較しようというものである。いま、l個、m個、n個の３つの集団を想定してみる。これら、$l+m+n$個の全データが作るバラツキが求められる。このバラツキが群間のバラツキと群内のバラツキによって構成されていると考える。ここでいう、バラツキとは、各データと平均との差(偏差)を２乗の合計したもので、平方和といわれる。ここでも、自由度が大きな意味を持ってくる。全体のデータが与えられた場合、つまり全体平均が与えられた場合、l、m、n個の群の平均は、いずれかの２群の平均が決まれば、残りの１群の平均は必然的に決定される。つまり、群間での自由度は群の数よりひとつ減ることになる。今の例でいうならば、３群だから、自由度は２となる。次に群内のバラツキであるが、これは、元のデータと各群の平均との差を取り上げることになる。この時の平方和は群平均との差を求めるわけだから、群内のバラツキは$l-1$個、$m-1$個、$n-1$個までは自由に想定されるが、最後のひとつは群平均となるような値でなければならない。このため、群内の自由度は$l+m+n-3$となる。ここでも、平方和はデータの数が大きくなれば必然的に大きな値となるので、その影響を取り除くために自由度との比を用いる。群内の平方和と群内の自由度の比と群間の平方和と群間の自由度の比との比が分散比と呼ばれるものになる。これがF検定である。

産社・社研での5年間、そしてこれから

湊 邦生

本年3月31日付で退職し、4月1日からは高知大学地域協働学部(正式には教育研究部総合科学系地域協働教育学部門、だそうです)に准教授として着任することになりました。ポストドクターとして1年、助教として4年、合わせて5年の間、皆様には研究・教育・学内業務等々、本当にお世話になりました。何よりもまず、お礼を申し上げます。

5年前に私が奉職した際には、とりあえず任期の1年間頑張れればそれでよし、というぐらいの気持ちでした。研究者としても教育者としても何の実績を作れたわけでもなく、先行きの見通しもなかった自分にとって、言ってしまえば「拾い物」の1年を得たのだから、その間に心残りのないよう、やるだけのことはやろう、と考えであったのが正直なところです。それが思いがけず、引き続き産社でお世話いただけることになり、研究・教育はもちろんのこと、さまざまな面で貴重な経験を得ることができました。加えて、大学院GPに引き続き、社会学研究科グローバル・プロジェクトを通じて、さまざまな先生方と協力して教育・研究を行えたこと、また韓国・中央大学校、イギリス・ランカスター大学およびウォーリック大学などの先生方・院生の皆さんと、ある時はビデオリンクを通じ、またある時は直接往来して交流できたことは、他のどの大学でも得ることのできない宝です。そのような宝をどこまで活かせたかと言えば、はなはだ心もとないところではありますが、教育・研究をはじめあらゆる面で視野と可能性を大きく拡げられたこと、またともすれば内向きで悲観的な感情にとらわれがちな私が、何事にも挑戦していく気概を僅かなりとも持てるようになったことだけは、確かだと思っております。

5年間、私自身至らぬ点も多く、試行錯誤といえば聞こえはいいですが、いろいろと失敗を重ねることもしきりでした。ただ、それでも何とか今日を迎えることができたのは、皆様の温かいご支援やご協力あってのことと確信しております。研究者はどうあるべきか、また大学教育に携わる者はどうあるべきかを考える時に、見習うべき方々に恵まれたと実感しておりますし、本当に幸せでした。それだけに、助教として任期途中で辞任することには寂しさもございますし、また皆様にはご迷惑をお掛けしてしまうことを申し訳なく思っております。ですが、新たな道が見つかったならば、その道に進むのが任期付教員としてしかるべき選択である点をご理解いただけましたら幸甚です。

さて、その新たな道たる着任先の高知大学地域協働学部は，2015年度4月1日にスタートする新たな学部です。耳慣れない学部名かと思いますが、この学部は高知県内各地を学びの場として、地域社会の現状を理解し、その再生・発展に向けた取り組みを主導できる人材を育てることを目指しています。授業では高知県の農山漁村や市街地など、さまざ

まな土地において、地元の方々との協働の取り組みを行うことになっており、私自身も学生とともに、そのような取り組みに関わってまいります。私がこれまで経験したフィールドであるモンゴルの遊牧地域とは全く異なる現場で、新たに経験を一から積み上げていくことになります。加えて、本学部では高知県で初めてとなる社会調査士課程が開設されるため、関連する授業にも関わってまいります。本当に新しいことずくめになりますが、それだけに期待感もあります。何より、少子高齢化や人口減少などといった、現在の日本のみならず、世界のさまざまな地域社会が直面する課題に対して、正面から立ち向かう人々の列に加わることに、心が高揚する部分もございます。新たな学部において、この5年間で得た経験を活かすことができる場面も多々あるものと思っておりますし、そうすることで、新たな学部を軌道に乗せ、発展させていくことが、産社の「卒業生」としての私の義務だと思っております。

最後に、1つだけ皆様にお願いしたいことがございます。先にも述べましたが、私はこの5年間、大学院GP、社会学研究科グローバル・プロジェクトを通じて、産社・社研の国際化に向けた取り組みに携わってまいりました。その過程で、国際化のさまざまな業務に関わる方々の、表には出づらいご尽力・ご苦労を見ることも少なくありませんでした。同時に、国際化の成果や、国際化を通じてこそ得られる、世界の研究者との交流・連帯の素晴らしさも実感してきたつもりです。国際化の取り組みに関わり続けられたことは私にとって何よりの誇りですし、この取り組みがさらに多くの成果を上げるとともに、その成果がより多くの学生・教員・職員の方々に波及することを願ってやみません。ですので、今後1人でも多くの皆様が、産社・社研の国際化に対してご理解、ご協力いただき、この挑戦に加わっていただけるのであれば、それは私にとって何物にも代えがたい喜びです。

あらためまして、皆様に5年間のお礼を申し上げるとともに、私を育ててくれた産社・社研がアジアに、世界に開かれた教育・研究の場としてますます発展しますことを、心よりお祈り申し上げます。また、もし機会があれば、ぜひ高知に遊びにいらしてください。南国の陽気、美味しい食べ物・飲み物（とりわけお酒！）、何よりアクティブで温かい人々が、皆様をお待ちしています。

Zapping 原稿募集

研究会・学会報告の他、留学記、課外活動報告などあらゆるジャンルのご投稿をお待ちしております。また、いろんな特集も組んでいきたいと思っています。何本かまとめてのご投稿も大歓迎ですので、ご提案がありましたら事務局に申し出てください。形式はタイトル・名前・本文をつけ、1,500字～2,000字程度でお書きください。
原稿はs-kyoken@st.ritsumei.ac.jp に送付してくださいますようよろしくお願いします。